

## アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会 ＜シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第4回＞

日 時：2020年12月11日（金）

場 所：南山大学 オンライン講演会

テーマ：米大統領選とバイデン新政権の対朝鮮半島政策

報告者：中島 健太郎（読売新聞アメリカ総局長）

シリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」第4回講演会は、読売新聞アメリカ総局の中島健太郎総局長に講演をお願いした。アメリカ大統領選挙の結果、バイデン候補が当選したが、バイデン政権の朝鮮半島政策が今後の東アジア情勢に大きな意味を持つことは間違いない。そうした観点から、読売新聞前ソウル支局長でもある中島総局長から、バイデン政権の朝鮮半島政策について講演をお願いした。概要は以下の通り。

米大統領選は、民主党のバイデン前副大統領が勝利した。バイデン氏政権の外交安保チームは、国務長官にトニー・ブリンケン氏、国家安全保障担当補佐官にジェイク・サリバン氏、国防長官にロイド・オースティン氏を指名した。ブリンケン氏、サリバン氏は長年のバイデン氏の側近で、オバマ政権でも外交関係の要職を務めた。手堅いという評価がある。

注目されるのは、サリバン氏が「中産階級のための外交」を提案していることだ。中西部などの白人労働者がトランプ大統領の支持に回ったことで、16年大統領選でヒラリー・クリントン氏が敗れた反省から、陣営幹部だったサリバン氏は、特に通商問題などで国内問題を考慮するとみられる。

米政権では、政治任用の国務省、ホワイトハウス幹部らが実務を担うため、この陣容が固まらないと、どのような外交政策をとるかは、まだ見通せない。任命には数か月程度かかるとみられる。

バイデン氏の北朝鮮観は、10月のテレビ討論会で示されたように、基本的に「圧力を強化し、非核化を約束すれば対話に応じる」というオバマ政権の「戦略的忍耐」を踏襲したものだ。北朝鮮を「ヒトラー」になぞらえた点は、北朝鮮の反応が注目される。

今後の米朝関係を占う要素は、大きく三つほどあるように思う。一つは北朝鮮のバイデン政権への出方だ。ミサイル発射などの挑発を再開するのか、東京五輪参加で対

話攻勢に出る可能性があるのか。新型コロナが落ち着くまで何もしないのか。

二つ目は、米中関係の行方だ。米国内は、与野党も含めて対中強硬路線が支持を集めており、バイデン政権も厳しい姿勢をとるとみられる。ただ、気候変動などの課題については協力すると言っており、北朝鮮問題はそこに入るのかどうか。中国による北朝鮮制裁は穴だらけと言え、中朝関係の行方も影響を与える。

三つ目は、日米韓協力。プリンケン氏は日米韓の安保協力推進に熱心だったし、日韓の慰安婦合意を後押ししたのもオバマ政権だった。日韓関係は徴用工問題をめぐって、改善の糸口がつかめない状況で、北朝鮮の挑発次第では、日米韓協力の焦点があたりうる可能性もあるように思う。

ただ、いずれにしろ、今の段階で、バイデン政権の大対北朝鮮政策がどうなるか見通すのは容易ではない。

(文責：平岩 俊司)